

コロナ禍の中学校における「剣道」の授業実践 —武道学習の課題を踏まえた授業づくり—

善家 瑛徳（愛媛大学）

1. 目的

2008年に武道学習は必修化された。剣道では、道徳性など子どもの人格形成に影響を与えていると言われる。一方で、生徒のほとんどが剣道初心者であること、教師の指導経験が少ないこと、感染症予防に留意することなど、課題が少なくない。

そこで、本研究では、コロナ禍の中学校体育授業において、初心者が安全・安心に剣道を学ぶことができる授業を構想し、剣道経験が異なる2人の指導者による実践を通して、考案した剣道授業の成果と課題を検証することにした。

2. 分析・考察

授業実践は、2021年10月～12月の期間に、愛媛県内のF中学校第2学年4クラス123名(男子62名、女子61名)を対象に行った。授業は、剣道未経験のS教諭と剣道経験15年の研究者本人が各2クラスを担当した。前半は剣道に親しむために開発した剣道遊びの教材を用いた「たの剣」(小単元①)、後半は演武を工夫して剣道の本質に迫るための「真剣」(小単元②)の全9時間単元で構成した。コロナ禍や剣道学習の課題等を踏まえ、剣道具の未着用や発声をしなくても剣道の楽しさや本質に触れることを目指して、授業を構想・実践した。その成果と課題を、以下の方法で検証した。

(1) 形成的授業評価

各実践において“成果”及び“学び方”の次元の値が各小単元の終末にかけて上昇していた。このことから、生徒は、各小単元で「できる」喜びを感じ、意欲的に学習に取り組んでいることが確認できた。

(2) 学習成果に関する調査

○知識及び技能の習得に関する調査

各小単元において、90%以上の生徒が知識や技能が身についたと感じていた。「たの剣」では、竹刀操作とすり足、「真剣」では、残心と礼法が身についたと感じた生徒が多かった。

○イメージ調査

単元後の調査では、93%の生徒が剣道のイメージを

肯定的に捉えていた。剣道未経験の生徒でも剣道が楽しかったと評価する授業内容であったと考えられる。

○動作分析

「構え」「振り方」「すり足」等の基本動作の習得状況を分析したところ、概ね基本動作を身につけていることが確認できた。ただし、「構え」において左踵が床に接地している生徒が多かった。このことから足の位置に着目した指導や支援が必要であると考えられる。

(3) 生徒による授業評価

○単元構成に関する調査

各実践において、75%の生徒が「たの剣・真剣両方とも楽しかった」と回答した。また、自由記述からは、剣道初心者がたの剣を通して剣道に親しめたことが示唆された。つまり、単元を構成する際には、本格的な剣道を学ぶ前段階として「たの剣」を導入することが意義深いものであると考えられる。

○剣道具、発声に関する調査

剣道具を着用したり、発声をしたりすることができない状況においても、指導者の剣道経験にかかわらず、90%以上の生徒が楽しさを感じていた。

○教具に関する調査

簡易竹刀が安全性や操縦性を兼ね備え、技能習得に役立つことが明らかになった。一方で、耐久性に課題があり教具の再開発を行う必要があると考えられる。

(4) 指導者の声

S教諭へのインタビュー調査から、たの剣・真剣で用いた教材は、剣道経験が無くても指導可能であることがわかった。

3. 結論

本研究で構想した「たの剣」と「真剣」からなる剣道の授業実践は、初心者でも、コロナ禍でも楽しめる授業、剣道の本質に触れることができる授業であったことが確認できた。一方で、簡易竹刀の耐久性について課題が残った。また、生徒や指導者の実態に応じた授業を実現するために単元計画や教材を工夫することや剣道具を活用した授業づくりを行うなど、今後更なる授業実践を積み重ねていく必要がある。